

船守弥三郎殿許御書

弘長元年六月二七日 四〇歳

わざと使使ひを以て、ちまき・さけ・ほしひ・さんせう・かみしなじな給おわひ候ひ畢あわんぬ。又つかひ申され候は、御かくさせ給へと申し上げ候へと、日蓮心得申すべく候。

日蓮去ぬる五月十二日流罪の時、その津につきて候ひしに、いまだ名をもきゝをよびまいらせず候ところに、船よりあがりくるしみ候ひきところに、ねんごろにあたらせ給ひ候ひし事はいかなる宿しゆくじゅう習じゅうなるらん。過去に法華經の行者にてわたらせ給へるが、今末法にふなもりの弥三郎と生まれかはりて日蓮をあわれみ給ふか。たとひ男はさもあるべきに、女房の身として食をあたへ、洗せんぞく足すくてうづ其の外さも事ねんごろなる事、日蓮はしらず不思議とも申すばかりなし。ことに三十日あまりありて内心に法華經を信じ、日蓮を供養し給ふ事いかなる事のよしなるや。かゝる地頭・万民、日蓮をにくみねたむ事鎌倉よりもすぎたり。見るものは目をひき、きく人はあだむ。ことに五月のころなれば米もとぼしかるらんに、日蓮を内々にてはぐくみ給ひしことは、日蓮が父母の伊豆の伊東川奈かわなと云ふところに生まれかはり給ふか。法華經の第四に云はく「及び清しょうしん信しん士し女にょを遣はして法師を供養せしめ」云云。法華經を行ぜん者をば、諸天善神等、或はを男とことなり、或は女となり、形をかへ、さまざまに供養してたすくべしと云ふ經文なり。弥三郎殿夫婦しにょの士女と生まれて、日蓮法師を供養する事疑ひなし。さきにまいらせし文につぶさにかきて候ひし間、今はくはしからず。

ことに当地頭の病悩について、祈請せい申すべきよし仰せ候ひし間、案にあつかひて候。然れども一分信仰の心を日蓮に出だし給へば、法華經へそせうとこそおもひ候へ。此の時じゅうらは十羅刹女もいかでか力をあはせ給はざるべきと思ひ候ひて、法華經・釈迦・多宝・十方の諸仏並びに天照・八幡・大小の神じんぎ等ぎに申して候。定めて評議ありてぞしるしをばあらはし給はん、よも日蓮をば捨てさせ給はじ。いたきとかゆきとの如く、あてがはせ給はんとおもひ候ひしに、ついに病悩治なをり、海中鱗いろくずの中より出現の仏体を日蓮にたまはる事、此の病悩のゆへなり。さだめて十羅刹女のせめなり。此の功德も夫婦二人の功德となるべし。

我等衆生無始よりこのかた生死海の中にありしが、法華經の行者となりて無始色心本むししきしんほん是ぜり理りょう性みょうきょう・妙みょう境じょう妙みょう智ち金剛不滅こんごうふめつの仏身とならん事、あにかの仏にかはるべきや。過去久遠じんてん五百塵点ごひゃくじんてんのそのかみ唯我一人の教主釈尊とは我等衆生の事なり。法華經の一念三千の法門、常住此説法のふるまひなり。かゝるたうとき法華經と釈尊にてを異はせども凡夫はしる事なし。寿命品に云はく「顛倒の衆生をして近しと雖も而も見えざらしむ」とはこれなり。迷悟の不同は沙羅の四見の如し。一念三千の仏と申すは法界の成仏と云ふ事にて候ぞ。雪山童子のまへにきたりし鬼神たいしゃくは帝てい釈しゃくのへん変さ作しなり。尸毘王しびおうの所へにげ入りし鳩びしゅかつは毘首羯摩天びんぞくおうぞかし。班足王の城へ入りし普明王ふみょうおうは教主釈尊にてまします。肉眼にくげんは

しらず、仏眼は此をみる。虚空と大海とは魚鳥の飛行するあとあり。此等は経文にみえたり。木像即金色なり、金色即木像なり。あぬるだが金はうさぎとなり死人となる。釈摩男がたなごころにはいさごも金となる。此等は思議すべからず。凡夫即仏なり、仏即凡夫なり、一念三千我実成仏これなり。

しからば夫婦二人は教主大覚世尊の生まれかわり給ひて日蓮をたすけ給ふか。伊東とかわなのみちのほどはちかく候へども心はとをし。後のためにふみをまいらせ候ぞ。人にかたらずして心得させ給へ。すこしも人しるならば御ためあしかりぬべし。むねのうちにをきてかたり給ふ事なかれ。あなかしこあなかしこ。南無妙法蓮華経。

弘長元年六月廿七日

日蓮花押

船守弥三郎殿許へ之を遣はす